

モンゴル国カザフ人社会におけるジェンダーの形成と社会的役割

廣田 千恵子

日本学術振興会/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

Gender Formation and Social Roles in Kazakh Society in Mongolia

HIROTA Chieko

JSPS/Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

This paper reports on the social roles imposed on men and women, especially after marriage, and their transformation, taking into account the gender recognition process in Kazakh society in Mongolia.

Kazakhs are recognized as men and women socially through marriage. Having nomadism as the basis of their culture and its social structure based on patrilineal origins, Kazakhs still adhere to the rule of exogamy. Due to the two transformations of the social system that took place in the 20th century, there are differences in marriage patterns and religious beliefs depending on the period.

The main social roles expected of men and women are to carry on the family line and to establish their own family. Specifically, they are expected to (i) bear and nurture children, (ii) link household networks, and (iii) fulfil their gender roles in their livelihood. On the other hand, if circumstances prevent them from fulfilling these roles, they may divorce, remarry, adopt or migrate with the help of relatives.

キーワード：カザフ、家父長制、イスラーム、牧畜、婚姻

Keywords: Kazakh, patriarchy, Islam, pastoralism, marriage

はじめに

中央アジアの諸民族は、家父長制やイスラーム信仰、ソビエト連邦の社会主義体制とその崩壊など、ジェンダーに関わる文化習俗、社会的道徳、歴史的経験において多くの共通性をもつ（磯貝・帯谷 2023）。そうした中央アジア社会を対象とした近年のジェンダー研究においては、伝統的なジェンダー規範と新しい社会的価値観との狭間で揺れ動く女性たちの姿が描かれてきた。

たとえば、海外への出稼ぎ労働者が急増するウズベク社会では、出稼ぎ労働によって生じた収入格差やマーケット規模の拡大からムスリム女性のライフスタイルが変化し、ジェンダー規範を逸脱した生き方を選択する女性たちが現れ始めている（Kikuta 2016: 99-100）。

カザフ社会においては、即興の歌を競い合う歌競技アイトゥスを事例として、娯楽の中で伝統的なジェンダー観が歌われることで、社会的に共有されていく過程が詳述されている（Salimjan 2017）。他方、アイトゥスはまた、女性の歌い手が公の場で女性としての生きづらさを発信する手段ともなっている（Salimjan 2017: 273-274）。

クルグズ（キルギス）の農村地域においては、外部からの支援のもと、女性のエンパワーメントの向上を目指した経済的な国際開発プロジェクトが展開されているが、一方で当該社会における女性間のヒエラルヒーや、地域間にある経済的格差といった、単なる男女の差異にとどまらない社会的な差異が内包されている点が見逃されているなど、課題も多い（Kim et al. 2018: 243-244）。

このように、ジェンダーとは多様な社会的な問題に切り込む視点であり（中谷 2003: 383）、総じて中央アジア社会においては、伝統的なジェンダー観が人々の思考や行動様式に根付いているがゆえに、社会的・経済的な変

化が進むほど、新たに芽生えた価値観との間で葛藤する弱者が生まれやすい状況にある。ただし、社会的弱者が決して女性に限らないということにも留意したい¹⁾。

こうした研究蓄積を踏まえたうえで、本稿ではモンゴル国のカザフ人社会を事例とし²⁾、ジェンダー的な男女の線引きや性別役割分担が明確かつ典型的な社会において、人と社会がジェンダーをどのように捉え、向き合ってきたのかということについて概括する。

モンゴル国のカザフ人は、移民かつ少数民族という条件が相まって、今も親族的・地域的な紐帯が強固である（廣田 2023a）。くわえて、彼らはカザフスタンのカザフ人などからも伝統的なカザフ文化を継承した人々と評され（Diener 2009: 159）、自身も文化的な規範を守ることに意識的である。こうした環境下においては、ジェンダー観がより典型的なものとなり、規範を守れない人々が弱者として位置づけられやすい。しかしその一方で、そうした弱者を支える社会的な仕組みもまた、存在している。

本稿ではまず、対象社会におけるジェンダーの形成過程を概観したうえで、婚姻後の男女に課される社会的な役割について詳述する。くわえて、ジェンダー的な役割を果たせない人々が、親族との紐帯をつうじて離婚、再婚、養子縁組、移住をおこなうことによって問題に対処している様子を報告する³⁾。

1. モンゴル国のカザフ人社会

1.1 バヤン・ウルギー県

(1) 人口・地理

2021年現在、モンゴル国のカザフ人人口は約12万人で、そのうち約8割が国内最西端にあるバヤン・ウルギー県で暮らしている。同県の人口の約9割をカザフ人が占め

る。県の北部はロシアのアルタイ共和国と、南部は中国の新疆ウイグル自治区と国境を接している。また、西部はカザフスタンと近接している。

バヤン・ウルギー県はアルタイ山脈山中に位置している。県面積は約 46,000km² である。県面積の 95% を占める土地は標高 1,600m 以上にあり、これはモンゴル国内の他地域の平均標高より高い。また、土地の起伏が大きく、同じ県内・郡内であっても標高差に応じて降雨量、降雪量、気温、植生条件が異なる（廣田 2023b: 152-154）。

(2) 社会・経済体制

バヤン・ウルギー県は、1940 年に成立した。成立当時、モンゴル（モンゴル人民共和国）は社会主義体制を採っていた。1950 年代以降は計画経済体制のもと、農牧業の社会主義的集団化が進められた。同県では前述の地理的環境条件により農業には不向きであったことから、主に牧畜業が営まれた（Сулган & Зулькафиль 2010: 39）。

社会主義体制期には近代化が進められ、男女平等の思想が広まり、文化的慣習に変化が起こった。たとえば、婚姻儀礼においては、他の社会主義国と同様に（藤本 2023: 176）、女性の身売りとも解釈されるような高額な婚資の贈与や、誘拐婚、一夫多妻制などが禁止された。また、教育や労働機会においても男女の差が問われ、牧畜業においては性に依りて役割が割り当てられた。

1992 年になると社会主義体制が崩壊し、民主主義体制に移行した。しかし、急激な社会改革は、経済的な混乱を引き起こした。モンゴル国のカザフ人は生活の安定化を求めて「祖国」であるカザフスタンへと移住を始めた（Diener 2009）。これによりモンゴル国のカザフ人の中には、カザフスタンに親兄弟が居住しているという人も多く、両国に跨った親族ネットワークが構築されている。

さらに、カザフスタンの独立や同国への往来によって、2000 年代以降モンゴル国のカザフ人の間でカザフとしての民族意識が高揚した（Diener 2009: 298-299）。

しかし、民主化から 30 年以上経過した現在も経済状況は厳しい。パンデミック以前の 2019 年の統計では、県内の失業率は就労可能人口のおよそ 10% を占めている。とりわけ 20 歳～34 歳の失業者が多く、職を求めて海外や首都などへ出稼ぎ、移住する人が後を絶たない。さらに、2020 年以降はパンデミックとウクライナ戦争の影響を受けて、同地域の物価は以前の 2～3 倍に上がっており、地域の経済状況は厳しさを増している。

(3) 主な生業としての牧畜

バヤン・ウルギー県の主な産業は牧畜である。遊牧を文化の基盤としてきたカザフ人にとって、牧畜はカザフ特有の文化習俗や社会構造の維持にも関わる生業である。

統計資料によると、2021 年現在、県の総世帯数の 4 割弱が牧畜を専業としている（Баянөлгий аймгийн стасистикийн хэлтэс 2022）。また、専業ではないが、家畜を所有している世帯は県の総世帯数の 7 割弱を占めている。つまり、同県では大半の世帯が何らかの形で家畜の飼育に関与している。

主な飼養家畜は、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダである。飼養されている家畜の全ては食用としてその肉と乳が求められる。また、毛や毛皮などの畜産物は、住居のパーツや調度品、衣服などの製作に用いられている。さらに、ウマやラクダといった大型家畜は、乗用、運搬用手段としても利用されている。

1.2 イスラームの信仰

カザフ人が信仰している宗教はイスラームである。イスラームは中央ユーラシア地域で広く受容されているが、その受容の度合いは民族、時代、社会条件による。

モンゴル国のカザフ人の場合、19 世紀後半以降にアルタイ山脈北麓に移住し、その後 1930 年代に宗教弾圧を受けている。その後、社会主義期を通じて宗教の信仰が禁じられたが、1990 年代に社会体制が変わると、モスクやマドラサが建設され、人々の中で徐々に宗教に対する意識が深まっていった。

現在では、日々の礼拝や断食、犠牲祭、割礼など宗教的な実践がおこなわれている。ただし、本来的にはイスラームにおいておこなわれることのない行為が見受けられることもあり、厳格に信仰しているというよりはむしろ土着の信仰や思考と交錯している。

1.3 父系を中心とした社会構造と紐帯

ユーラシア地域におけるテュルク系・モンゴル系遊牧民の社会構造は、父系出自原理に基づくものである（Krader 1963: 9-11）。カザフ人社会は民族の下に下位カテゴリーが複数存在し、それら集団が父系血縁集団によって統合される構造になっている。カザフ人は性にかかわらず、生涯自身の帰属を変更することはできない。

カザフには父系 7 世代を経るまでその子孫が互いに結婚してはならないという外婚制の規則があり、婚姻は異なる父系出自集団に属する者同士でおこなわれる。つまり、カザフ人にとって婚姻とは、女性が男性側の親族集団に入ることを通じて、異なる 2 つの集団が関係を結ぶことである。モンゴル国のカザフ人の通婚範囲はさほど広くない。たいていはモンゴル国に暮らすカザフ人同士が結婚相手として選ばれている。

父系親族を中心とした集団的つながりと相互扶助の意識は、現在のカザフの人々の生活の中にもみられる。たとえば、子育てや、婚姻や葬儀などの儀礼における準備はたいてい親族同士が協力しておこなう。

他方、婚姻を経て関係を結んだ姻戚は、カザフ人にとって最も尊重すべき相手であり、日常的な助けを求めることはない。しかし、親族間では解決できない問題が生じた時の頼りとして期待されており、それゆえに婚姻の存在は重要な社会的意義をもつ。

2. ジェンダーの認識過程

本章ではカザフ人のジェンダー認識過程について、とくに呼称、衣服、しつけに着目しつつ概観する。

2.1 「男」になる過程

生まれた子が生物学的性において男であった場合、そ

の子はウル (ур) ⁴⁾ とよばれ、「男」として育てられる。男子はその家系を継ぐ存在としてみなされている。

男子がウルと呼ばれる期間は、生まれてから16歳ごろまでである。男子は16歳以降になると、ウルからジギット (жігіт) とよばれるようになる。ジギットという言葉は、カザフ人の男らしさにおいて非常に肯定的な意味合いをもつ概念であり、人々に「強く、颯爽とした若者」(Salimjan 2017: 272) を想起させる。聞き取りによると、カザフ人社会において男性は力強く、勇敢であることが期待されている。そして、経済力が求められている。

素晴らしいジギットと評されることは、男性にとって誇らしいことである。反対に、そうした理想的な姿ではないこと、社会的な規範や期待に応えられない状態のことを、人々は恥ずべきことと考える。この状態のことを、カザフ語でウヤット (ұят) という (廣田 2023a)。

親は子へのしつけの際に、カザフ人にとってウヤットにあたることを教えることによって、ジェンダー規範を含む文化的ルールを学ばせる。たとえば、聞き取りによると、民主化直後の1990年代頃までの家庭内教育では男子が女子の仕事をするのはウヤットであった。

ウルからジギットに移行する過程においては、服装にも変化がみられる。男性の衣服の種類には、長衣、シャツ、ズボン、帽子、スーツなどがある。なかでも、タキヤ (такя) という円形の帽子はジギットになってから着用される。

ジギットは婚礼適齢期 ⁵⁾ を迎え、異性と結婚するとエルケク (еркек) となる。これは総称としての男を表す言葉でもある。ただし、結婚後も年齢が若い限りはジギットとも呼ばれる。

やがて孫ができると男性は「おじいさん」を意味するアタ (ата) / アタス (атасы) ⁶⁾ とよばれるようになる。あるいは、チャル (шал) ともいう。また、アクサカル (аксакал) とよばれる高齢男性は、集団の意見をまとめ導く長として位置づけられている。

2.2 「女」になる過程

生まれた子が生物学的性において女であった場合、その子はクズ (кыз) とよばれ、「女」として育てられる。クズとは「娘」を意味する。クズは男子と異なり、年齢に関係なく結婚するまでクズと呼ばれる。

カザフ人にとって理想的な女性とは、勤労で、慎み深く、夫や姻戚と良き関係を築ける存在である。婚姻のルールからもわかるように、カザフの女性は婚礼を介して2つの父系出自集団を結ぶ存在である。それゆえに、女子は幼い頃から良い嫁の条件を母親や姉から学ぶ。

婚姻直前の女子は姻戚に対するウヤットを避けるようにと、母親からとくに様々な注意を受ける。たとえば、姻戚たちを尊重すること、早起きをして勤労であること、肌を露出することは避けて身だしなみに注意することなどである。女性の衣服の種類には、長衣、ワンピース、スカート、スカーフなどがあり、これらを着用して肌の露出を可能な限り避ける。

クズは結婚後、アイエル (әйел) となる。アイエルは総称としての女を表す言葉でもある。また、「嫁」を意味するケレン (келін)、ケレンチク (келіншік) ともいう。

女性は結婚すると、服装にも変化がみられる。たとえば、クズは丈の長いズボンを身につけられるが、結婚後にズボンを履くことは年長者に対する不敬にあたる。また、婚礼後の女性は頭にスカーフを巻いて髪全体を覆う。スカーフのことをチュト (шыт) という。つまり、女性はチュトの有無で婚姻しているかどうか判断される。

孫が生まれると、女性は「おばあさん」を意味するアパ (апа) / アパス (апасы) や、ケンピル (кемпір) とよばれる。高齢女性が着用する衣服には、キメシエク (кимешек) という刺繍付きの布とその上から被るチュラウシ (шылауыш) という覆いがある。ただし、これらを実際にいつから纏うかは個人の判断による。

3. 婚姻後の生活における男女の役割

以上のように、男女は幼い頃から呼称や服装、親からの教育を介して少しずつ自身の性を認識していく。そのなかで、婚姻を契機として総称としての男女とよばれる存在となっている点に着目すると、カザフのジェンダーにおいて婚姻が重要な転換点であることがうかがえる。

これを踏まえたくえで、以下では婚姻後の男女に課せられる役割について詳述する。

3.1 男女に課される役割

カザフ語で「結婚する」ことを、ウイレノウ (үйлену) という。ウイ (үй) とは「家」を意味する語であり、結婚は新たな家族の形成の契機である (藤本 2023: 172)。そのために、夫婦となった男女には、まず子を産み、育てることが求められる。

カザフの男女は、婚姻を経て初めて性交が許される。カザフを含め、イスラーム社会では貞節や純潔は男女双方に課される道徳的義務である (岩崎 2004: 39)。

子の誕生は男女問わず喜ばれる。ただし、父系氏族社会であるカザフにおいては、とくに男子を産んで家系を継ぐことが暗黙のうちに期待されている。

子を産み育てることが社会的な役割である背景には、社会主義期における政策も関係している。社会主義期のモンゴルにおいては、国力を増すことが求められていたため、子を多く産み人口の増加に貢献した母は表彰された (小長谷 1999: 5)。インフォーマントの中には、一組の夫婦の間に10人、あるいはそれ以上の子がいるという世帯があった。

多産は統計にも表れている。2021年の統計によると、バヤン・ウルギー県の普通出生率は26.9%である。これは、モンゴル国全体の普通出生率を上回っている。

3.2 男性の役割

バヤン・ウルギー県のカザフ人社会、とりわけ牧畜を生業とするコミュニティでは、今日も明確な男女分業が成り立っている。

「家」を生活の基点として捉えてみると、男性は主に

家の「外」でおこなう仕事を担う。たとえば、牧畜を生業とする男性の場合、日常的な放牧や、家畜の毛刈り、災害時における緊急避難的な長距離移動⁷⁾、大型家畜の飼育や調教、草刈りなど越冬のための飼料の準備などをおこなう。これらの仕事の中には、長期間の外出や過酷な野外泊を伴う仕事も含まれており、体力が要される。

外部との社会的・経済的交渉を担うのも、基本的には男性である。そのため、飼養家畜頭数や種類の管理、畜産品の売買は、たいてい男性がおこなう。そのほか、屠畜の際には、男性が命を絶ち、その肉を切り分ける。これも、「外」を担う役割といえよう。

また、こうした日常的な労働に関連して、ものづくりにもジェンダーが反映されている。カザフの手仕事は、性によって相応しいとされる素材と技法が異なる（廣田 2023a）。男性が扱う主な素材は木材、金属、革などで、それらの素材から大型家具や調理道具、馬具をはじめとする牧畜・狩猟道具、装身具を作る。とりわけ、道具類は男性自身の労働に欠かせないものである。

さらに、慶事や祝宴といった非日常の場においても、男性は客人、つまり外の者との交流を担う。カザフ人社会には、親戚や姻戚を世帯単位で家に招く饗応の習慣がある（Werner 1997）。集まった人々は食事を囲みつつ、贈答品の交換などをおこなうことによって、互いの社会関係を確認し合う。男性にはそうした饗応の場において、客人を迎え入れ、楽しく語り、食事をふるまっ相手を尊重し、そして自身も主人としての威厳を示すことが求められてきた。

3.3 女性の役割

一方、女性の役割は主に家の「内」の仕事にある。ムスリム女性は私的空間である家庭を中心に生活すべきだと考えられ、公的空間に出ることは禁止されていたが（岩崎 2004: 26）、カザフもまた女性に対して、火をくべて暖を取る、茶を淹れる、調理する、ベッド周りの整頓、掃除、洗濯など、家庭内の仕事を担うよう求めている。

牧畜における女性の役割は搾乳や乳製品作り、仔畜の出産補助などである。これらは社会主義期を通じて明確に定められた。また、屠畜の際には内臓処理をおこなう。

また、日常的な放牧や家畜小屋の掃除など、一部の外仕事は女性もおこなっている。性別分業型であるとされてきた狩猟採集社会において、実際には男女それぞれが「オールラウンドプレーヤー」（今村 2000: 46）でなければならないことが指摘されてきたように、牧畜においても本来的には性を問わずあらゆる労働をこなせなければ、厳しい草原生活を生き抜くことは難しい。ただし、女性が男性の仕事を手伝うよう促されるのに対して、男性が女性の仕事をすることはウヤットとみなされる⁸⁾。

さらに、衣服や家の中で用いる調度品を作ることも、女性の役割である（廣田 2023a）。女性が扱う主な素材は、毛、植物、布、糸で、衣服や敷物、壁掛けなどを作る。女性が作るものは、姻戚へ贈答されることもある。ものの質次第では相手を不快にさせることもあるため、女性

のものづくりには高い技術が求められる。いいかえれば、女性は家と家との関係を結び深める役割を担っている。

その様子は、饗応の場面でもうかがえる。カザフ人社会では慶事や祝宴は家で開催されることが多く、女性がその準備をおこなう。饗応の段取りを決めて、客人を選び、当日までに客人をもてなすための食べ物や贈物の準備をする。女性無しには宴を催すことは難しく、その意味では女性は他者との交渉の場や社会的関係を生み出すイニシアティブを握っている（Werner 1997: 65）。

4. ジェンダー規範が生み出す社会的弱者

このように、カザフの男女には明確なジェンダーロールがあり、男女は共に支え合って生きていく。

一方で、全ての男女が家庭を築くという役割を遂行できるとは限らない。様々な事情によりその役割を果たせない人々の社会生活はその親族によって支えられる。

4.1 家族の形成に困難を抱える人々

カザフの男女は子を産み、育てることを何よりも求められている。しかし、身体的な問題により、結婚しても子に恵まれない夫婦もいる。聞き取りによると、昨今では大都市の病院で検査を受けて、どちらが子を産めない原因となっているか調べることもある。男性が原因だった場合、とくにウヤットであるとして重く受け止められる傾向にあり、なかには自死を選択する人もいるという。

また、子を産んだとしても、配偶者の事故や病気によって、家庭を築けなくなることがある。とくに子が幼いうちに配偶者を失うと、生活が困難になる。

さらに、少数ではあるものの、モンゴル国カザフ人社会においても心身の性が一致していない性的少数者がいる。そうした状態にある人のことを、クズ・テケ（кыз теке）という。クズは「娘」を、テケは「種オスヤギ」を意味しており、侮蔑語にあたる。

クズ・テケになる経緯は様々であるが、聞き取りによると、男子の誕生を望んでいた両親によって、「男」となるように教育を受けた女子が、自身の性を位置づけられなくなってしまうといった事例が多いという。

同地域における性的少数者の正確な数の把握は難しい。というのも、こうした存在は社会的にウヤットとみなされ、家族や親族の中で隠されてしまうからである。また、ジェンダー道徳に反する存在は「悪化する現代生活の象徴」とみなされ、たとえば性別が逆転したファッションシンボルなどは批判・嘲笑の対象として歌競技で引き合いにも出される（Salimjan 2017: 267）。総じて、社会全体として性的少数者への理解は著しく乏しい。

4.2 親族ネットワークによって支えられる生と性

家庭を築けない男女は、基本的には両親や親族の協力を得て離婚・再婚をしてこの問題に対処する。親族は離婚が成立したあと、同様に再婚相手を求めている人を探す手伝いをする。

他方、子を授けられない原因であると判断された方は再婚が難しいため、生家に戻って他者とのかわりを持た

ずに生活するか、海外に移住して一人で生計を立てることを選択する。とくに、カザフスタンには民主化以降モンゴル国から移住した人々が同郷コミュニティを形成しつつ暮らしている。親族を頼れる分、移住のハードルは低い (Werner and Barcus 2015: 262)。

なお、現在ではかつてと異なり婚姻は自身が選んだ相手とおこなうようになっており⁹⁾、子を授けられないことで離縁したくないと考える夫婦も増えている。2017年の調査時に出会ったバヤン・ウルギー県のボルガン郡に暮らす1990年代生まれの夫婦は、離縁しないために養子を迎えて育てるという選択をしていた。

夫婦の間に子がいたにもかかわらず離婚せざるを得なくなった場合、その後の選択は多様である。たとえば、男性が亡くなった場合、女性は子を男性の両親の養子に入れて、自身は生家に戻って再婚の機会をうかがう。

カザフには、長男のもとに最初に生まれた子を両親の子として養子に入れるという習慣がある。これは、祖父母が幼い子を育てることによって、将来面倒をみってくれる後見人を育てることに繋がっていたためである。また、カザフは末子相続制であることから、養子として入れられた子に財産を相続させることを目的としているといわれている。実際、現在のモンゴル国の制度では、祖父母の養子となった子(孫)は祖父母が亡くなった後も、満18歳になるまでは祖父母の年金を受け取っている。

このように父系出自を重んじるカザフ人社会では、子はいたい男性の両親によって引き取られてきた。配偶者を失った女性が、前夫との子を連れのまま再婚をする例は少ない。また、子を養子に入れても年齢の問題などで再婚が難しい場合、たいていは親族を頼ってカザフスタンやウランバートルなどの都市部に移住する。

移住はまた、心身の性の不一致が原因で結婚できない人にとっても重要な選択肢である。性的少数者は人目を避けながら生家で暮らすか、海外、特に親族のいるカザフスタンへと移住する。ただし、カザフスタンでも性的少数者に対する偏見は厳しいため、そのまま移住先で静かに暮らすことを望む人もいれば、数年経過した後、心身の性を一致させ、再び故郷へと戻る人もいるという。

おわりに

モンゴル国バヤン・ウルギー県のカザフ人社会において、人々は生物学的性に依拠して呼称や服装が分けられ、家庭内教育の中で男性性・女性性を身につけながらジェンダーを形成する。そして、男女は婚姻を経て社会的な存在となると、まず子を産み育てることが求められる。生活の基点は「家」にあり、男性は「外」、女性は「内」に関わる仕事を担いつつ、支え合いながら生きている。こうしたジェンダー観は、人々の間では伝統的な文化習慣であり、守るべきものと捉えられている。

中央アジアのジェンダーに関する報告では、伝統的なジェンダー観と新たな社会的価値観との間で生じた性差を超えた格差や、新たな生き方を模索する女性の葛藤な

どが報告されてきた。他方、調査地においては現状では世代を問わず、たいていの人々が伝統的なジェンダー規範に沿った生き方を選択している。しかしその選択は、彼らが規範から逸脱しにくい社会にいることよって(無意識的に)促されているともいえるだろう。

バヤン・ウルギー県は国内の少数民族であるカザフ人が唯一多数を占める地域であり、カザフとしての民族意識や文化習俗を保ちやすい環境にある。とくに、民主化以降に活発となったカザフスタンとの往来や、信仰の復活といった流れは、人々にジェンダー規範を含むあらゆる文化的習慣を守ることを促してきた。

一方で、狭い通婚範囲からもうかがえるように、バヤン・ウルギー県という地域はカザフ人を中心とした閉鎖的な移民社会でもある。そうした社会に生きるカザフ人にとって、婚姻は少しでも社会的な紐帯を広げていく重要な手段である。それゆえに、姻戚に対して不敬にならないようにと、カザフのウヤットに値することを幼い頃から学び、ジェンダー道徳を身につけてきた。

さらに、バヤン・ウルギー県は牧畜利用に適した地理環境下にあり、牧畜業が社会主義期以降続く明確な性別分業体制とともに維持されてきたことも、異なる価値観が広まりにくい状況である一因となっている。

このように、バヤン・ウルギー県のカザフ人社会における社会性および地域的特徴は、彼らのジェンダー観を確固たるものとしてきた。その一方で、病気や事故、性の不一致などの理由でジェンダー的役割を果たせない人々も存在する。とくに、性的少数者はジェンダー規範が強い社会であるからこそ生み出され、疎外されている。

しかし、そうした人々の生活を支えているのもまた、同社会の社会性であり、父系出自親族間の紐帯である。社会的な弱者はその親族の協力によって、養子や末子相続制といった仕組みを利用しつつ再婚の機会を得る。

さらに、親族の協力を経て対処してもなお、バヤン・ウルギー県で生きることには困難を感じる人々は、カザフスタン、すなわち外の社会へ移住するを選択できる。その際も、頼りとなるのは親族ネットワークである。ただし、裏を返せば、移住の選択肢はバヤン・ウルギーという限られた社会内部における価値観を却って強固なものにしている要因とも解釈できよう。

現在、調査地においては経済難にともない出稼ぎ・移住する人が増えており、将来的にはウズベク社会で報告されているような地域コミュニティ自体の変容(Kikuta 2016)が起こることも予想される。その際、同地域のカザフ人のジェンダー観にどのような変化が起こるのか¹⁰⁾、今後の展開に注目したい。

注

1) 中央アジアのジェンダー研究において男性視点の研究や性的少数者が抱える問題について取り上げた論文は少ない。ただし、これはジェンダー研究そのものにおける課題でもある。

- 2) 本稿と同じモンゴル国のカザフ人社会を対象とした研究の中には、彼らがカザフスタンへ移住することによって、女性が家父長的な社会制度への依存を強めざるを得ない状況に置かれていると報告したものもある (Werner and Barcus 2015)。
- 3) 本稿の内容は筆者が 2011 年から 2019 年、2023 年にかけておこなった、カザフの装飾・手芸文化の動態に関する調査中に得た記録に基づく。
- 4) 本稿のカザフ語表記はモンゴル人民共和国で 1940 年に制定された改良キリル文字カザフ語の正書法に則って楷書体で記す。
- 5) 婚礼適齢期に明確な決まりはないが、現在では男女ともに 22 歳頃には結婚を意識するようになるという。なお、法律上は 18 歳から結婚できる。
- 6) アタスはアタ (祖父) に三人称接尾辞が付いて、一般的な「おじいさん」の意。後述のアパスも同様。
- 7) 災害からの緊急避難のための長距離移動のことを、カザフ語でオタル (orap) という (廣田 2023b: 174)。
- 8) ただし、2000 年代以降、県内の都市部では男性も家事労働をおこなうようになりつつある。
- 9) 社会主義期以前のカザフ人社会では婚姻相手は親によって決められていた (廣田 2021)。また、社会主義期においても親は婚姻相手の選択に影響していた。
- 10) 2023 年の現地調査では、すでに経済的困難によって婚姻儀礼を催せない人も現れ始めていた。こうした変化は晩婚化、あるいは結婚せずに生きるという選択の増加に繋がる可能性もあるだろう。

引用文献

日本語文献

磯貝真澄・帯谷知可編

2023 『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭 歴史から現在をみる』 国際書院：東京

今村薫

2000 「ジェンダーから見た狩猟採集社会」 名古屋学院大学論集 (社会科学篇) 37(2): 43-52.

岩崎雅美

2004 『中国・シルクロードの女性と生活』 東方出版：大阪

小長谷有紀

1999 「草原の国を変えた女性たち — モンゴル —」 窪田幸子・八木祐子編 『社会変容と女性 ジェンダーの文化人類学』 pp.4-35. ナカニシヤ出版：京都

中谷文美

2003 「人類学のジェンダー研究とフェミニズム」 『民族学研究』 68(3): 372-393.

廣田千恵子

2021 「モンゴル国カザフ人の婚姻儀礼とその変化」 『北海道民族学』 17: 69-73.

2023a 「モンゴル国カザフ人の装飾文化動態 — 移民・少数民族の文化継承と変容に関する考察 —」 令和

4 年度千葉大学大学院学位申請論文 (博士) (未公開)

2023b 「山地環境下における牧畜と季節移動：21 世紀モンゴル国カザフ牧畜民を事例として」 今村薫編 『中央アジア牧畜社会 人・動物・交錯・移動』 pp.150-181. 京都大学学術出版会：京都

藤本透子

2023 「結婚をめぐる交渉：中央ユーラシア草原地帯におけるカザフ社会の変容」 磯貝真澄・帯谷知可編 『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭 歴史から現在をみる』 pp.169-202. 国際書院：東京

外国語文献

Diener, A.C.

2009 *One Homeland or Two? The Nationalization and Transnationalization of Mongolia's Kazakhs*. Stanford University Press: Redwood City

Kikuta, H.

2016 Remittances, Rituals and Reconsidering Women's Norms in Mahallas: Emigrant Labour and Its Social Effects in Ferghana Valley. *Central Asian Survey* 35(1): 91-104.

Kim, E. (et.al.)

2018 Making the "Empowered Woman": Exploring Contradictions in Gender and Development Programming in Kyrgyzstan. *Central Asian Survey* 37(2): 228-246.

Krader, L.

1963 *Social Organization of the Mongol-Turkic Pastoral Nomads*. Indiana University Publications: Bloomington

Salimjan, G.

2017 Debating Gender and Kazakhness: Memory and Voice in Poetic Duel Aytis between China and Kazakhstan. *Central Asian Survey* 36(2): 263-280.

Werner, A.C.

1997 Women and The Art of Household Networking in Rural Kazakhstan. *The Islamic Quarterly* 41(1): 52-68.

Werner, C. and Barcus, H.

2015 The Unequal Burdens of Repatriation: A Gendered View of the Transnational Migration of Mongolia's Kazakh Population. *American Anthropologist* 117(2): 257-271.

Баянөлгий аймгийн стасистикийн хэлтэс

2022 *Статисткийн эмхэтгэл 2021Он*. (バヤン・ウルギー県統計局統計集 2021 年) Өлгий хот

Султан, Т., and Зулькафиль, М.

2010 *БАЯНӨЛГИЙ АЙМГИЙН НЭВТЭРХИЙ ТОЛЬ*. (バヤン・ウルギー県百科事典) Соёмбо принтинг